

図書館だより

Library News No.62

Nara National College of Technology

2005年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



わたし、いま、恋をしている。
ベゴニアの花言葉は、「片思い」。
なぜって、葉の形が、みぎひだり非対称だから。
片思いだって、恋だ。
なぜって、はじめから両思いなんてこと、あるわけないもの。
だから、
わたし、いま、恋をしている。

絵 51 市川まどか さん
文 しみずたかお

目 次

巻頭言「わたしの読書法」.....	2	学生会図書委員会	
読書感想文コンクールを終えて	3	「マイベストセレクション」	18
入賞作品紹介	5	巻末よみもの	
退職教員からのメッセージ	14	「ぎりぎりの英会話学習法」	20
総合情報センターより	16		

私が授業中に語って印象に残った言葉を、ある学生が『泉語録』として書きとめていたことがある。その学生の学業成績はお世辞にも良いとはいえなかったが、専門の記述とはインクの色を違えてボールペンで克明に記されていた。ノートのメモを見て語り手の私自身がほしくなり、どうしたものかと逡巡した挙句、自分自身で作ることにした。その名も『泉語録』として、もう10年近くにもなるだろうか。気に入った言葉は、意外な時に予想外の反応をともなって発露する。新鮮な野菜と同じで、みずみずしさを残すその日のうちにノートにメモするようにしてきたが、慌しく過ぎる日々の勢いには勝てず、捨て去られた言葉の数は書き溜めたものをはるかに上回っている。

ところで、もともと私にはメモ魔の片鱗があるので、本を読み終えると付箋をつけた箇所をメモするような習慣がある。私の価値観や人生観などと違和感のあるような言葉（文章）は、もともとフィルターにかけられているので、都合よく表現すれば、メモされた文章はそのまま私のゴーストライターによる作品とみなせなくもない。言い換えると、色んな本から抽出したそれらの文章は、私の実人生と合わさって、泉語録として昇華しているのだと思っている。

さて、このように泉語録のソースともいえる本との出会いは、大概偶然であって、意図的に求めることはほとんどなかったように思う。青春の一時期、深く人生の思索に富む書物に没頭することはあったが、ある時期から特定の作家やジャンルに限らず広く書物を求めるようになった。それはちょうど妻と図書館通いを始めた頃なので、特別読書傾向が変わったわけでもなく単純に経済的な理由だけであったかも知れない。したがって我が家の蔵書は専門書を除いて最近ほとんど増えることがなく、部屋のスペースを効率的に利用できるようになっている。

そこで問題は図書館で借りる本の選び方だが、最新のベストセラーを欲張らないかぎり、単純な選書法に越したことはないと考え、アイウエオ順に作家を選び、そのうえで作品を選ぶことにしている。名づけてアイウエ読書。ラジオ放送でアイウエ歌謡曲という番組があり、音楽を聴いているうちに閃いた方法である。「ン」を除く44のイニシアルの作家を図書館で選ぶ楽しみがあるけれども、たくさんの作家がいるイニシアルと、見つかりにくいイニシアルがある。「ケ」「ソ」「チ」などのイニシアルも苦労するが、ラ行となるともっと大変だ。とどのつまり、このあたりのイニシアルは日本の作家を諦めて外国作家のファミリーネームを選ぶことになる。例えば、『フィリップス氏の普通の日』（ジョン・ランチェスター、高橋進訳、白水社）、『22世紀から回顧する21世紀全史』（ジェントリー・リー、マイクル・ホワイト、高橋和子、対馬妙共訳、アーティストハウスパブリッシャーズ）、『モーツアルトのドン・ジョバンニ』（アンソニー・ルーデル、田中樹里訳、角川書店）といった具合である。気に入った作家は、そのイニシアルが巡ってくるたびに別の作品を読む楽しみがある。知らない作家の気に入った作品に出会うのも、この読書法の良さである。もちろん順番を入れ替えて、知人から薦められた作家の作品を先に読むことはある。

本の筋書は読書の段階で楽しみ、自分に合った文章や考え方はメモして残すのが私の読書法。それらのメモが授業や講演会などの様々な機会に知恵袋となり、袋から引き出されては自分自身に対応しい形に加工され、泉語録として納まっていくのは嬉しいものである。

平成16年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第29回読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は375編。その中から、情報メディア教育センター運営委員会と国語科、計10名による投票・審査の結果、次の最優秀作1編と優秀作8編が入選となりました。以下に、その氏名とタイトルを記し、その栄誉をたたえたいと思います。

最優秀賞

機械工学科 2年 藤江 勇太 「レールを見つめて」読書感想文

優秀賞

情報工学科 3年 福井 梨恵 「いちご同盟 純愛 - 中学編」を読んで

電子制御工学科 2年 松井 秀樹 「蹴りたい背中」を読んで

情報工学科 2年 奥村 哲郎 「ハシヤン」に学ぶ戦争と平和

物質化学工学科 2年 安田菜都希 「秘密」(東野圭吾・著)を読んで

電子制御工学科 1年 福谷 健太 アリソン

情報工学科 1年 奥平 哲矢 高瀬舟を読んで

物質化学工学科 1年 奥村 彬子 夢枕獏の「陰陽師」を読んで

物質化学工学科 1年 北里 慎悟 人が生まれながらに知っていること

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で高い評価を受けて佳作とされたものは、以下の諸君の作品です。これらの諸君にも賞賛の辞を呈したいと思います。

2 M 井丸 大幹	2 M 富岡 泰匡	2 M 堀川 基造	2 E 服部 成輝
2 E 平田 芳郎	2 E 堀 威士	2 S 池内 亮太	2 S 辻井ありさ
2 S 野口 卓磨	2 I 植田圭奈子	2 I 河合 誠	2 I 多田 秀顕
2 I 東浦 成良	2 C 佐野 江美	2 C 山内 友恵	2 C 吉本 咲香
1 M 小畑 智彦	1 M 黒川 一輝	1 M 小林 由和	1 E 尾上 健太
1 E 桂田 信祐	1 E 中西 啓太	1 E 柳 さなえ	1 S 萩原 拓実
1 S 樋口 裕磨	1 S 吉田 千夏	1 I 上窪 善裕	1 I 仁池 卓史
1 I 松川 香澄	1 C 隅野 慶子	1 C 中塚 佳一	1 C 藤本 隼平

この他にも、力作が多くありました。「ここには残念ながら名前があがらなかったけれど、入選を目指して頑張った諸君」、「もともと文章を書くのは苦手が入選など思いもよらないけれど、それでも自分なりに一生懸命努力したと思う諸君」、国語科の一教員としては、そんな諸君一人一人に直接お

礼を言いたい気持ちですが、それもできません。この場を借りて厚く感謝の意を表します。

以下、恒例にしたがい、入選作について審査に携わった者の一人としてコメントを付します。

まず、最優秀作となった藤江勇太くんの作品で第一印象として浮ぶのは、短いセンテンスをたたみかけるようにして述べられた、鉄道員に対する藤江くんの心の「熱さ」です。このような文章の成否を決定づけるのは、その「熱さ」にどれだけ読む人を引き込むことができるかどうか。それが外れると、単なる一人よがりになってしまいます。今回の藤江くんの文章が高く評価されたのは、その際どい所をクリアできるだけの文章力が藤江くんに備わっていたからだと思いますが、それにしても、全てが数値化され、打算的に生きることが評価される時代に、「覚悟」とか「実感」とかという言葉に共感しつつ自らの「あこがれ」を語る「熱い若者の熱い文章」に出会えたのは、個人的には大きな幸せでした。

優秀作となった作品中、最も高い評価を得たのは1I・奥平哲矢くんの作品でした。何より評価したいのは、森鷗外の名作に挑戦したこと。そして、それをきちんと読みこなし、そこから得た感想をきちんと文章化している所です。文章的には、まだまだやはり1年生だと感じさせる所がありますが、次のコンクールでも、是非また「名作」に挑んで下さい。大いに期待します。

次に高い評価を得たのは、3I・福井梨恵さんの作品でした。福井さんは、これで前々回の最優秀作を含め3年連続の入選となります。文章の上手さ、まとまりの良さなど、今まで同様、最高クラスの出来ばえなのですが、逆に、そのまとまりの良さが、3年連続となると、最優秀作とするには今ひとつ物足りない感を与える結果になったのではないかと感じます。

2S・松井秀樹くんの作品は芥川賞を受賞した新進女流作家の話題作を選んでいますが、その作品の雰囲気がよく出た感想文に仕上がっていると感じました。「恋愛小説、というのには少し違う気がするし、友情物語と考えるとかなりずれる気がする。でもそんな微妙さが、逆に新鮮な感じがして、嫌いじゃない話だなと思った。」という所など、うまいですネ。

2I・奥村哲郎くんの作品は、戦争と平和という定番のテーマを扱っていますが、橋田信介氏の人生を通じて、「平和のためには、命がけの行動ができる個人が必要である」というパラドックスに気づいている点で、従来のありきたりな読書感想文をこえたものになっていると感じました。

2C・安田菜都希さんの作品は、文章が上手で、非常によくまとまっていると思います。何より、好きな作家の作品を、安田さん自身が楽しく読んでいることが窺える所が嬉しく感じました。

1S・福谷健太くんは、冒険活劇ファンタジーを選び、その概要と主題が非常に的確に表現されている感想文に仕上がっています。これだけの力があるなら、今回は、漱石でも鷗外でも太宰でも、誰でもいいから、是非もっと本格的な作品に挑戦してほしいと思います。

1C・奥村彬子さんが選んだのはベスト・セラーとなった半空想時代小説ですが、このような娯楽性の強い作品で大切なのは、何よりも楽しく読めることです。読書感想文として、そこがきっちり書けていることが、入選作となったポイントだったと思います。

1C・北里慎悟くんの作品は、15歳年下の弟が生まれたという体験を通して知った人間の赤ちゃんの持つ能力への素直な感動がよく感じとられます。文章は決して上手なわけではないのですが、内容にふさわしい純朴さがあり、非常に好感がもてる感想文になっていると感じました。

(国語科・勢田)

入賞作品紹介

『レールを見詰めて』

田中休太郎 著

「レールを見詰めて」読書感想文

2M 藤江 勇太

最初に書いてしまうと、自分は鉄道が好きだ。だからこの本を読む気になった。

かつて大阪駅で一人の駅員さんと話をする機会があった。人目もはばからず、カメラなどをぶら下げて駅のホームをウロウロとしている自分に少なからず興味(?)をもたれたのかも知れない。

「もうあと半年で退職や。」

いろいろ話をしているうちにさみしそうに言われたのだった。そして誇らしげに自分の軌跡を話された。鉄道員としての人生の中で、ほとんどが車掌として列車に乗られていた。正に「鉄道員」であったと素人ながら思ったのだった。

著者は一人の人間でありながら、列車にひかれかけ、駅で空襲にあい、国労のつるし上げにあい、と、レールの上では一鉄道員として生き続けた。決して列車は待ってくれない。同じレールの上を、ひたすら走るだけ。そしてそれを走らせるために鉄道員がいる。だからレールの上では人間ではいられないのだ。実際そう思っていたのかはわからないが、自分にはそんな気がする。本の中の鉄道員とあの大阪駅で出会った鉄道員とが重なるのだ。

自分にとって鉄道員とは正直「あこがれ」である。はずかしながら、これは昔から変わらない。鉄道があれば必ずそこには鉄道員がいる。決して鉄道員の苦勞を知っているわけでもないし、むしろ知らないからこんなことが言えるのかも知れない。その苦勞はいくら本で読んだところで、目の前で見たとしても、あくまで他人事としてしか受けとめられないと思う。それで

も指差喚呼する白手袋にあこがれ、小さかった自分に向けて手をふってくれた運転士や車掌にあこがれ、線路わきで白旗をふる人々にあこがれる。自分はまだ何もわかっていない。井の中の蛙、大海を知らずとでも言うべきであり、すごく弱い人間だと思う。しかし自分は仮にもそんな人々に「あこがれ」をもち、そんな人々になりたいと思う。それはこの著者と同じ思いだった。「レールを見詰めて」果たしてどういう思いでレールを見詰めるのか。本から読み取ることをしようとするより、自分自身で「レールを見詰めて」みたい。

「安全は実感がないと守れない。体で安全を守ります。」

三重県の山奥の駅で信号設備が旧式のものから近代化される直前の助役さんの言葉だ。この言葉によって何故か、とてつもない安心感をもつことになる。そして「覚悟」。この本の文中によく目にする言葉。この「実感」と「覚悟」。二つの言葉にはそれぞれ何とも言えない重さがあった。その重さは決して最新型のコンピュータにはない様な感じの、油くさい、説得力のある重さとも言うべきか、と思う。

結局、自分自身の中で勝手な「鉄道員像」を作っているような気がしないでもない。それが良くも悪くも「あこがれ」になり、そして夢を与えて頂いている。そんな夢を与えて下さっている人々に心から感謝すべきだと思う。何もわからない自分であるが、それはそれなりに生きていこうと思う。そしてあの鉄道員達のように自分を誇れる様になりたい。

今日もどこかで一人、指差喚呼をする姿がある。そしてその向こうにはレールがあるのだ。

『いちご同盟 純愛 - 中学編』

三田誠広 著

「いちご同盟 純愛 - 中学編」を読んで

3I 福井 梨恵

「つらくてもいいから、生きていたい...。」

この言葉は、この本の登場人物の一人が言ったものだ。私の心に最も残った一節の言葉である。

この本は、十五歳の中学生の心の揺らぎを描いた作品である。主人公の北沢良一は、ピアノを弾く事が好きな中学三年生である。周りが高校受験一色に染まっていく中で、自分の歩むべき道を考え始める。そんなある日、良一は、同じ中学で野球部のエース、羽根木徹也から、自分の出場する試合をビデオに撮ってくれと頼まれ、引き受ける。「こいつには人の命がかかっている」という彼の強い口調から、一体誰に見せるのかと思っていた良一だが、それは入院中の彼の友達、上原直美のためのテープだった。直美は足を切断しなければならぬ程の重症の腫瘍を患い、「自分の未来に絶望している」、「可能性のある日がうらやましい」と言う。しかし、その強い瞳に良一は惹かれていく。そして、病状が悪化し、死にゆく直美を前に、徹也と良一は十五歳の「一五同盟」を組み、直美が生きていた事をずっと憶えていようと誓い合うのである。

冒頭の言葉は、この直美の言葉である。この言葉を含む一節を読んで、私はふと、一つの言葉を思い出した。

「あなたが生きている今日は、昨日死んだ誰かが生きたかった一日」という言葉だ。何処で読んだのかは分からないが、この言葉は私の胸にとっても残っている。私はまだ、良一のように親しい人の死というものに出会った事があまりないために、そのような時に、どのような気持ちになるのかが、よく分かっていないと思う。しかし、きっと、言葉では表現できない程の想いと、涙を味わうことだろう。私の母の体験談

を聞くと、どれ程までに辛い事がよく分かる。

私の叔母にあたる、母の妹は、おそらく、直美と同じ病気で十五歳のときに亡くなった。骨肉腫という悪性の腫瘍で、十代に多い、いわゆる『骨のガン』である。医者 of 誤診が原因で治療が遅れ、病状が悪化し、足を切断したが、肺に転移し、とても苦しみながら亡くなったと言う。直美も私の叔母も、この病気にかからなければ、沢山の夢を抱いて、明るい未来があったに違いない。この2人だけではない、病気や事件、そして事故に遭ってしまい、生きたかったのに生きられなかった方達のことを思うと、私が生きている一日一日がとても尊くて、大事なものだと感じられる。一日を何もせずに過ごすというのは、とても勿体無い事なのである。

また、この物語には、小学五年生で自殺した少年の話も出てくる。主人公はその少年の遺した

「むりをして生きていても

どうせみんな

死んでしまうんだ

ばかやろう」

という言葉は何度も思い出して、生と死というものを考えている。「どうせみんな死んでしまう」のだから死ぬといった少年と、「つらくても生きていたい」と願った少女。この2人を通して考えている良一の心を、私も読者として、少なからず感じる事ができたと思っている。

現代社会では、自殺は社会問題となるほど多いが、私は、自殺を考える人に、自分が生きている一分一秒を『生きたい』と思いながら死んでいった人達の思いを考えて欲しい。勿論、殺人を犯す人や、ただ平凡に毎日を過ごす人達にも考えてみて欲しい。きっと、何事もない一日が、どんなに幸せか、気付けるはずだから...

『蹴りたい背中』

綿矢りさ 著

「蹴りたい背中」を読んで

2S 松井 秀樹

史上最年少、芥川賞受賞作。それだけでも十分読む気にさせる。さらにその本の帯にかかれていた言葉にひかれた。

「愛しいよりも、いじめたいよりも、もっと乱暴な、この気持ち」

僕はただ怪しげな感じがするなと思いつつも、どんな気持ちかはよく分からなかった。愛しいという「正」の気持ちといじめたいという「負」の気持ちを類似させている気がする。さらにそこから「乱暴」という雑なところへいく。どうということなのだろう。よく言う好きな子にはいたずらしたくなる的な感情なのだろうか。そんなことを考えながら僕は本を読み始めた。

この作品で僕がすばらしいと感じたところは、表現の仕方だった。しかもそれは初めからだった。「さびしさは鳴る。」ぞくぞくくるほどおもしろい表現だった。そして、そのたくみな言葉使いによって表される人物の感情や場の空気はありありと伝わってきた。しかもほとんどのページに使われているから驚きだった。

しかし、この本のストーリーはどうだったのかと聞かれると、正直僕はわからない。一番の理由はおそらくこの本がどんなジャンルの本が分からなかったことだろう。恋愛小説、というのには少し違う気がするし、友情物語と考えるとかなりずれる気がする。でもそんな微妙さが、逆に新鮮な感じがして、嫌いじゃない話だなと思った。

そして、やはり登場人物が個性的でおもしろかった。まず、主人公の女の子だ。人生につかれた感じで、なおかつ「人間」という生き物をかなり知っている。いや、知ったが故に人生につかれた感がでているのかもしれない。そういう人間関係のなかでつくられる仲間の輪に自分から入ろうとしない、いわゆる外から見ればち

よっと変わっている女の子である。そしてこの子が関わってくる男の子がまた外から見たら変わった子に属するにな川だ。そしてこの二人をつなぐのがファッションモデルのオリチャンという人である。あまり関わりはないがメイン人物の最後の一人が主人公の友達の絹代で、この人もまた人間がつくりあげる関係について知っているが、主人公とは違いグループに入っていく方である。と、それぞれが人間関係を表すピースになっていておもしろかった。

そして、この物語でやっぱり気になるのが主人公とにな川の関係だった。

主人公はたびたびにな川の悲痛な顔を見たくなり、蹴ったりするので、はじめ僕はサディストなのかなと思った。しかし、「痛いのが好きだったら、きっと私はもう蹴りたなくなるだろう。だって蹴ってるほうも蹴られているほうも喜んでるなんて、なんだか不潔だ。」という言葉から、どうもサディストにはしたくないらしいという気がする。それじゃあ、やっぱり好きな子にいたずらしたい精神にあてはまるのだろうかと考えた。きっとこれを主人公に伝えたら「違う」といわれそうな気がした。

結局のところこの話を読んでいると、おびにかかれてあった通りの「もっと乱暴な、この気持ち」というのがマッチしている気がした。

本からはいろいろなものが僕は得られるような気がする。この本は今までにない何か引っかけられるような微妙さを残してくれた。その微妙さが新鮮でどこか心地いい気がした。この本はまだまだ深いものがある気がするのでまた読み直したいと思う。

『イラクの中心で、バカとさけぶ』

橋田信介 著

「ハシヤン」に学ぶ戦争と平和

2I 奥村 哲郎

「命なんざー、使うときに、使わなきゃー、意味がない」

この言葉はハシヤンが生前に何度も言った台詞である。「ハシヤン」とはこの本の著者である故橋田信介氏のことである。わたしがこの人を知ったのは、あるニュース番組でイラクの戦争報道をしていた時であった。それから数ヵ月後、皮肉にもイラク国内で襲撃され死亡した。少し前にはテレビに出ていた人が急にこの世から消えてしまったのにとっても驚いた。このニュースはさまざまなメディアで報道され、そのときにこの本を知った。そして、図書館にあるのを見て即座に借りた。

さて、この台詞は私がこの本の中で一番印象に残った言葉である。戦争ジャーナリストという職業は時には国家や法律に反してでも戦場を報道するのである。まさに生と死は隣りあわせで、昨日居た場所が爆撃されたり、著者のようにいつ殺されるかわからないのである。そんな中で彼らは幾多の戦争をくぐってきたのである。そんな人だからこそこの言葉に重みがあるのである。

また、この本には次のような文章がある。

「今度のブッシュの政策を支持していますか？」ハシヤンは聞いた。若い（米軍）将校ははっきりと答えた。「私は反対です。」

この文にはとても驚いた。日本人であるならばここまでストレートに、しかも兵士がこうは答えないだろう。日本人と言うのは社会的地位の高い人に対して反論することは少ない。また、政治に興味のある人は少なく私たちの世代でも少ない。そんな中で憲法は改正される方向ですでに議論がされている。特に第九条を巡って話し合いがされているらしい。日本は第二次世界大戦以来、世界から平和憲法といわれるほどの

憲法を持ってきた。そんな憲法を変えてしまうと言うのは私たちが将来、徴兵され戦争へ行かなければならないかもしれないということである。まだ論議は始まったばかりではあるが、このようなことも容易に想像できる。

話はだいぶそれてしまったが要は誰も望んで戦争に行くわけでないということである。旧日本軍では「国のために命を懸けて戦う」ことが名誉であったらしい。だが、自分の命がなくなってしまえばそれで何もかも終わってしまうのだ。ハシヤンの冒頭の台詞はこの命の大切さについて語っているのではないかと思う。

そして、ハシヤンの遺書と言うのがこの本の最後にある。

「自衛隊諸君、日本のバカ政府の尻拭いのために、アホ外務省のために全責任を引き受けようではないか。死して『大義』を残そうではないか。」

この言葉にこの本のすべての要素が詰まっていると思う。日本という間違った方向へ進んでしまった国の軍隊である自衛隊。しかし、その兵士たちにハシヤンは死ぬと言っているわけではない。むしろ「死ぬな」と言っているのである。彼自身が現地へ行き、情報プロパガンダと戦いながら命がけで真実を追うことはそう容易いものではない。彼の死をもって言えること、それは平和の大切さではなからうか。

「世界平和」

これは人類永遠のテーマである。人がいて国がある限り争いは永遠になくならない。だからこそ二度と日本として戦争に参加しないよう私たちが少しでも考えていくべきなのではないだろうか。そのためにもこの本を通して平和について考えることが出来たのではないかと思う。

『秘密』
東野圭吾 著

「秘密」(東野圭吾・著)を読んで 2C 安田 菜都希

「秘密」という言葉を耳にしたとき、どのようなイメージが思い浮かぶだろうか。「秘密」、辞書によれば密かに隠して人に知らせない事を言うらしい。「秘密結社」、「秘密組織」なんて使い方をすれば、何となく怪しげな感じがしてくる。そうかと思えば、小学生ぐらいの女の子同士の会話にありがちな「これは私たちだけの秘密よ。」なんて使い方をすれば、ワクワクするようなドキドキするような不思議さも漂ってくる。

人間は大なり小なり「秘密」を抱えて生きているような気がする。特定の人にだけ内緒にしておく小さな「秘密」から、絶対に誰にも知られたくない大きな「秘密」まで、種類や大きさは違えど誰しもが心の中に「秘密」の部分を持っている。私にもある。内容はもちろん「秘密」だけれど。

この本を手にとった理由の一つは、そんな魅惑の言葉「秘密」が本のタイトルに使用されていたことが一つと、もう一つは著者である東野圭吾氏の作品を以前から読んでおり、彼が私の好きな作家の一人であったからである。東野氏は工業系の大学からエンジニアとして勤務した後、作家デビューという少々変わった経歴を持った方である。エンジニアだったころの経験は作品にも生かされており、この「秘密」の主人公・杉田平介も高専出身のエンジニアという設定である。

物語は平介が妻・直子と小学5年生の娘・藻奈美を長野の実家に送り出すところから始まる。しかし、帰省途中に直子と藻奈美を乗せたバスが崖から転落。結果、藻奈美は意識不明の重体、直子は帰らぬ人となる。ところが直子の葬儀の夜、意識を取り戻した藻奈美の体に宿っていたのは死んだはずの直子の魂だった。その日から、二人の奇妙な「秘密」の生活が始まる。

これが物語のあらすじである。母と娘の心と体が入れ替わる。これだけ聞くといろいろな映画やドラマで使われがちなシチュエーションであるように思われるが、物語がただ単にそれだけで終わらず、切なくて感動的なものに仕上がっているのは、やはり著者・東野氏の力量といったところであろうか。

物語の序盤は少しコミカルに描かれている部分が多い。娘の体を持ってしまった母・直子は小学生が使わないような大人の言葉遣いをしてしまい、同級生や周りの大人たちを不審がらせては慌てて訂正する。夫(もしくは父?)平介も周囲の人間から再婚を薦められ、断るのに苦労する。この辺りは事情の分かる読者だけが密かに笑えるシーンであろう。

やがて直子は自分がこれからどう生きていくかを真剣に考え始める。そして辿り着いた結論は娘・藻奈美として生きていくということだった。それはいつか娘の魂が戻ってきたとしても最高の状態にしておいてあげるため。そしてもう一つは直子自身のためでもあった。彼女は主婦としての前の人生に決して後悔していたわけではない。大人であれば恐らく誰しもが考えること、「若いときにもっと勉強をしておけば、今とは違う人生だったかもしれない。」

奇跡的に二度目の人生を歩むことになった直子は、この人生を精一杯に生きようとする。しかし、それは簡単なことではなかった。藻奈美の体を持った直子は勉強やクラブ活動に励み、充実した学園生活を送る。周囲から見れば平介はよくできた自慢の娘を持つ父親であった。けれども、娘でありながら中身は妻であるという大きな秘密を抱えた平介にとっては素直に喜ぶことができなかった。あげくには直子に言い寄るボーイフレンドに男として嫉妬してしまい、怒りと同時に情けなさも感じてしまうのであった。

「夫でもなければ父親でもない。中途半端な俺はどうすればいいのか。」物語の中で描かれる

平介の葛藤は切ない気持ちが痛いほど伝わってきており、女である私ですら夫と父という立場の苦しさに共感してしまう。

そこから物語は意外な方向へと展開し、結果その切なさを損なうことなく、きれいに終結するのであった。さらにラストの数ページではさらに大きな「秘密」が明され、この物語のタイトル「秘密」の本当の意味を知ることができる。

そこには大きな感動と共に、物語の終焉ではなく新たな始まりを感じ、著者の力量をあらためて窺い知ることができるのである。

『アリソン』
時雨沢恵一 著

アリソン

1S 福谷 健太

この物語の舞台は巨大な大陸が一つだけある世界。その大陸は中央を流れるルト二河を境に東西の二つの連邦に分けられていて長い間、戦争を繰り返していた。戦争の理由は、お互いに自分達こそがヒトとしての先祖だと思っているからである。その東側、ロクシェに暮らす、学生ヴィルと軍人アリソンは街外れでホラ吹きで有名な老人と出会う。その老人は二人に“宝”の話をする。「その宝は、ロクシェとスー・ベー・イルの間の戦争を終わらせることができる。それだけの価値のある宝だ。」しかし、二人の目の前でその老人は誘拐されてしまう。そして二人は老人を追って、飛行機で西側の連邦、スー・ベー・イルへ宝探しに出発する。

この話は、世界観、ストーリーともにおもしろく、特にストーリーでの実写的な表現は独特で、読んでいて楽しい本だと思う。2つの国は戦争中だが今は休戦中ということで、話の中では割と平和な世界だと思える。しかし、終戦したわけではないので実際は微妙なバランスの上に成り立っている平和なんだと思う。そんな中、二人は敵国に不法侵入する。一步間違えば、再び戦争が始まってしまいそうな状況で、本質的

に戦争を終わらせるため、宝を探し求める。途中、スー・ベー・イルの軍人と空中戦になり、激しい戦闘の末、彼までをも味方につけて、宝の洞窟を目指す。冒険や戦闘のシーンはなんともいえない臨場感があり、胸躍るストーリー展開で、自分が冒険をしているような気になる。

そして、三人は遂に洞窟の最奥の真っ暗な大空洞、宝の在り処へと辿り着く。そこで三人が見たものは、壁一面に描かれたものすごい数の壁画だった。だがそれは、大発見には違いないが、これで戦争を終わらせることはできない。アリソンはがっかりするが、壁画を一つ一つ見ていたヴィルはやがて“本当の宝”を発見する。それは、太古より両国の象徴とされてきた、ロクシェの制式紋章“セロンの槍”とスー・ベー・イルの紋章“曲げ短刀”を向かい合った二人の男が持っている壁画。それぞれの先端に灯った炎が、それらが元々武器ですらなかったことを示していた。そしてそれは、ロクシェとスー・ベー・イルの人々が来た場所を同じにするという証拠。つまり、東西のどっちが先だとかいう、いがみ合いの一番大きな理由をすっぱりとなくすことができる、正真正銘の“宝”だった。

歴史とはいいかげんなものだと思う。それは、どんな歴史でも変わらない。二つの国は、かつて一つだった時に分け合った炎を、お互いに相手を殺すための武器に変えた。“真実をどうやって伝えるか”ではなく、“何を自分達の都合のいいように伝えるか”。人は、自分達に都合の悪い歴史をなかつたことにしようとする。そうやって歴史は伝わっていくうちに、どんどん書き換えられてきた。しかし、真実を封印しようとする歴史に未来はない。過去の過ちを認め、それを反省した時始めて人はよりよい未来を築いていくことができるのである。たとえ悪い歴史でも、真実を包み隠さず伝えていくことが重要だと思った。

『高瀬舟』
森鷗外 著

高瀬舟を読んで

1 I 奥平 哲矢

救うために殺す。僕はそれは罪にならないと思う。「殺す」という表現が悪い。「死なせてあげる」と言った方が合っているだろうか。そのような安楽死、決まった結論の出ない事について考えさせられる作品だった。

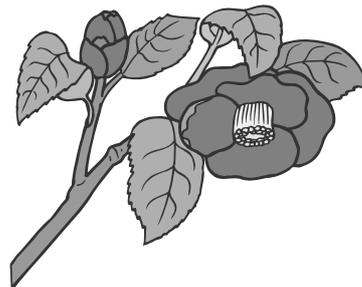
弟殺しの罪で島流しにされることになった喜助と、その舟の護送の羽田庄兵衛との会話が中心の話である。まず始めに喜助が島に行くことを苦にせず、逆に楽しみにしているというところを不思議に思った。今までの生活よりは楽だ、というのは痛々しい発言である。ものすごく苦労していたことが伝わってきた。ゆえに喜助は、「満足」というものを知っていた。少ないものでも満足し、欲がない。これは本当にすごいと思う。僕は本当に満足して、それで足りると思ったことは無いかもしれない。人の欲に限界はないと思うからだ。そして、この庄兵衛も同じようなことを次のように述べている。『人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食って行かれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあったらと思う。蓄えがあっても、又その蓄えがもっと多かったらと思う。かくの如くに先から先へと考えてみれば、人はどこまでも踏み止まることが出来るものやら分からない。それを今目の前で踏みとどまって見せてくれるのがこの喜助だ』まさにその通りだと思う。ここまですばらしい喜助が弟を簡単に殺すわけない、何かの間違いだ、と読んでいた途中で思った。

喜助の弟は病気になり、弟は自分のせいで苦労している兄を想って自殺を計った。しかし死にきれず、苦しみから救うため喜助は弟を殺した。救うために殺す……。今まで生きてきて、僕はそのような話をいくつも聞いてきた。苦しみ永らえるよりは、やはり早く死なせてほしい

と思う。現に喜助の弟はそう願っていた。だが客観的に見ると、最終的にはそれは「殺人」とみなされる。僕ならそこで、いや、僕でなくても必死で説明するだろう。しかし、死人に口無し。この状況はとてつらい。というより、逆に被害者は喜助ではないかと思ってしまう。弟に苦しそうに睨まれて、怨めしそうな目をされたのは、ある種逃げようのない脅しとはとれないだろうか。苦しいのはお互い様だろう。しかしこれも兄の為。それなのに兄は犯罪者扱いされるというのはかわいそうすぎる。

庄兵衛もそれが弟殺しであるのか、という疑が生じて悩み苦しんだに違いない。そしてその疑が解けないのでオオトリテエ（権威）に従い、お奉公様の判断にまかせた。これはもう、自分がこれ以上深く考えられない状態を示しているのだろう。『次第に更けて行く臙夜に、沈黙の二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った。』と最後にある。今までのことを通して考えてみると、この情景は遠島される喜助ではなく、庄兵衛の沈んだ気持ちを表しているのであろうと思う。

僕は喜助のような「足りている」を知り、前向きな気持ちを持ちたい。そして、「安楽死」についてもっと深く考えなければならない。そう思う。



『陰陽師』
夢枕獏 著

夢枕獏の「陰陽師」を読んで

1C 奥村 彬子

この本は、読み出すとすぐに物語の中に意識が入っていけるものだった。話の展開、謎解きが面白いというのも十分にあるのだが、何よりも夢枕獏の書く「安倍晴明」像が、私がいりりな資料などを見て無意識のうちに造り上げていた安倍晴明のイメージととてもよく似ていたのである。夢枕獏は安倍晴明を「風に漂いながら、夜の虚空に浮く雲のような男」と表現している。まさしくその通りだと私は思う。つかみどころがなく、常に冷静さを失わないで、一步退いた場所から物事を見ることができる。そんな男を私は想像している。

そんな、実にミステリアスな男にも、一人だけ親友がいたらしい。しょっちゅう晴明の屋敷に遊びに来て一緒に酒を飲み、晴明と共に都の怪事件を解決していくその男の名は、源博雅。武士だ。毎回、屋敷に遊びに来るたびに呪の難しい話を晴明にされてうんうん唸っている姿は、何とも可愛い。武士に対して「可愛い」という表現は適切ではないかもしれないが、夢枕獏はこの男を作中で何度も「どこか愛敬のある顔」と言っているし、晴明と博雅のかけあいは読んでいてとても楽しかった。晴明のややこしい言い回しや難しい呪の話に懸命に理解をしようと難しい顔をして、腕組みをしながら必死に考え込む博雅と、それを面白そうに見ながら微笑する晴明の姿がとても鮮明に頭に浮かんでくるのだ。あとがきで夢枕獏は、「晴明と博雅のかけあいは、書いていても実に楽しかった」と言っている。書き手の楽しみは、読み手にちゃんと伝わるのだと、少し嬉しく思った。

安倍晴明の母親は、妖狐だという伝説がある。物語の中でもそのことに少しふれる場面があった。牛車内の暗闇の中で急にそのことを言い出した晴明に博雅は「あやうく太刀に手をかける

ところだった」と怒った。しかしその後で「たとえ晴明が妖物であっても、自分は晴明の味方だ」とはっきり言った。晴明は、表情にこそ出さなかったが本当に嬉しかったのではないかと思う。こんなにも良い漢が自分の親友で、自分のことをとても好いていてくれるというのは、本当に幸せなことだろう。このシーンを読んだとき、本当に心が暖かくなった。この二人がともうらやましく感じ、同時に晴明に「良かったね」と声をかけたくなった。晴明は彼の性格からしてめったにそういったことを口に出す男ではないだろうが、思いは博雅と同じだろう。彼は感情表現が苦手なだけかもしれない。

互いを認め合って、助け合って、生きていく。親友として、共に生きる。そんな人間関係を誰かと築けたら...。「陰陽師」は安倍晴明の力のすごさ、平安の闇の怪奇さだけではなく、友達がいることの幸せさや新たに築いていく人間関係の大切さも私の心の奥深くに刻みつけてくれた、とても偉大な作品だと思う。



『赤ちゃんパワー・脳科学があかす育ちのしくみ』
小西行郎・吹田恭子 著

人が生まれながらに知っていること

1C 北里 慎悟

僕には昨年にも生まれた十五才年下の弟がいます。弟はいつも愛らしい仕草や表情などで僕をいろいろと、幸せな気持ちにさせてくれます。僕はこの弟がどういう事を考えているのか、またどのように接していった方がいいのかと思い、この「赤ちゃんパワー・脳科学があかす育ちのしくみ」という本を手に取りました。僕はこの本にある赤ちゃんに対する様々な実験や研究の結果を読んで赤ちゃんの何気ない行動に秘められた意味があることや、赤ちゃんには驚くべき潜在能力があることなどを知り、とても感動しました。

僕がこの本を読んで知ったこと、まずお腹の中の赤ちゃんはいろいろと不思議なことをしています。赤ちゃんはお腹の中に存在し始めてからすでに着々と生まれてきて人間が生きるのに欠かせない行動の練習を始めているそうです。僕は今までお腹の中にいる赤ちゃんはへその緒から栄養をもらっているだけだと思っていましたが、実はそうではなく指しゃぶりやあくびやしゃっくりをして横隔膜をきたえていたり、さらにはハイハイのような動きまでしたりと何も教えられていないのにそのような事をしていたのを知り、赤ちゃんの生きるための、強い力を感じました。

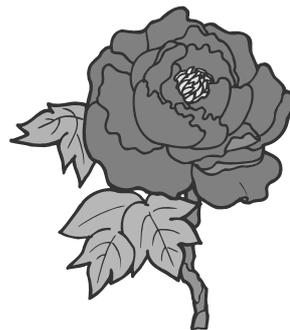
更に、赤ちゃんはお腹から出てきてからはもっとすごい力を発揮します。その中でも特に僕が驚いたことがあります。それは赤ちゃんには大人に無い能力、共感覚があるということです。「共感覚」とはひとつの刺激を、本来受けるべき感覚能力以外のところでも認知できる能力のことです。例えば、赤ちゃんに目隠しをして、あるおしゃぶりを吸ってもらいます。そして形の違うおしゃぶりをいくつか用意しその中にまぎれ込ませます。最後に、目隠しを外すと、赤

ちゃんは自分が吸ったおしゃぶりに注目するらしいのです。つまり赤ちゃんは口や舌で感じとった触覚の刺激を、視覚的にも認識しているらしいということです。これは脳の中で色々な器感の神経回路がつながっているからであり、大人にそれができないのは大人になっていくうちにどんどん刈りとられて必要な神経回路だけが残るからということらしいのですが、僕は赤ちゃんがこれほど優れた感覚を持っているということ、そして様々な成長の可能性があるんだというふうに感じました。

また、赤ちゃんはとても頭が良く、何も教えていないのに1たす1などの計算もできるということも書かれてありました。もしそうだとすれば人は生まれながらにして計算能力が身に付いていることとなります。僕は人間の赤ちゃんはすごいと思いました。

他にも赤ちゃんにはすばらしい能力があります。それら一つ一つは赤ちゃんが回りの人々に育ててもらおうということに共通しています。回りの人々は赤ちゃんを育てていると思っていますでしょうが実はあの赤ちゃんの愛くるしい仕草によって育てさせられていると考える方が正解かもしれません。

僕は将来、子供を育くみ、育てるかもしれませんが、その時は子供の中にもともとある力を信じ、そして楽しく子供に育てさせられたらいいのではないかと思います。



大切な学生時代

一般教科 池永 彰吾

私はこの3月で定年となる。思い返すと、生まれて最初の20年少しを親元で過ごし、その後の約20年を沼津高専で、さらにその後の約20年を奈良高専で勤めさせていただいた。長い年月ではあったが意外と短いとも感じることもある。このような感慨は私だけでなく多くの方が感じておられるようである。既に先輩諸氏が言われているように、時間は年をとるに従い過ぎ去る早さはだんだん早くなっていくように感じる。

私の今までの人生の中で一番、時間の占める割合が大きいと感じているのは高校時代から大学時代である。友達と遊んだこと、勉強に明け暮れたこと、クラブ活動に精を出したこと、趣味のギターを始めたこと、数学の研究を始めたことなどいろいろなことがあった。ちょっと大げさかも知れないが、毎日が新しいこととの出会いであったように思う。

沼津高専時代では高専自体が創設されたばかりで、教職員も学生も一からやるんだという意気込みに溢れていた。時代もこれから高度成長期に入る少し前で、社会全体に活気がみなぎっていた時期でもある。私生活では、結婚し子供が出来、家を建てるといった過程があり、結構充実していたように思う。奈良高専時代でも当然いろいろな仕事や役職を経験したが、如何せん、上記の話の通り時間の経過はかなり早かったと感じている。毎日の変化の度合いが以前と比べて鈍化してきたからであろう。

今から思うと青春時代は特に貴重で大事な時期であった。多くの先人が同じようなことの経験談を話されているのであるからこれは真実と思って良い。もしも何もせず無気力な生活を送っているのであればこの意味でも、もったいないことである。学生諸君の皆さんにはこの高専時代に勉学やクラブ活動などに大いに精を出して、ますます充実した青春を送って頂きたいというのが私の切なる願いである。

ユビキタスな社会

電気工学科 宮田 正幸

この3月をもって奈良高専を退職することになりました。この間、図書委員には何回かお世話になりましたが、これといった仕事をしたとは思いつけず、申し訳なく思っています。

私の読書については場当たり的で、特にポリシーがあったわけではありません。定年近くなると、なかなか一冊の本を読み切ることが出来なくなりました。「これではいけない活字だけでも」と思い、IT関連の雑誌や本をたくさん読みあさるように心がけました。

丁度、図書委員会が情報メディア教育センターに吸収されることになり、その中で学生諸君にユビ

キタス関連の書籍を推薦させてもらいました。ユビキタスとは、「偏在」「どこでも」という意味です。この言葉のもとであるらしい意味は、ブキャナン著「歴史の方程式」の原題である“ Ubiquity ” だそうです。何故このような訳になったかはわかりませんが、「彼は様々な現象を“ べき法則 ” と呼ばれる現象に注目して解を求めた。ユビキタスな社会とは個々の小さな行いが大きな動きにつながる可能性を常に含んだ方程式の下にある」と小橋氏（マーケティング雑誌編集長）は述べています。また、こうも解釈しています。「歴史は砂山を作るようなものであり、崩落を繰り返し高く積み上がる。やがて臨界点を超えると、小さなきっかけで次の崩落を生み大きく崩れる」。本校も独法化され、中期目標、JABEE教育プログラムが形成されています。目標達成の解は、いずれに当てはまるのでしょうか。砂上の楼閣にならないような方程式の解が得られるよう、心からお祈りしています。

研究者を目指される方へ

物質化学工学科 井口 高行

以前の「図書館だより」で「二重らせん」についてM科学生の感想文が紹介されていましたが、この本は私にとっても思い出のある本です。この3月に停年を迎える私が、40年ほど前の大学院生のとき、後輩が「これ面白いですよ」と持ってきたのがこの本でした。2、3ヶ月前に本校の図書館で、偶然少々色あせたこの本を見つけ懐かしく再読しました。原著「THE DOUBLE HELIX」は英国で1968年に発行され、同じ年に日本語に翻訳発行されました。ですから発行後間なしに読んだことになります。内容はワトソン博士（米国）とクリック博士（英国）の二人でDNAが「二重らせん構造」であることを発見するまでの記録を書いた本です。二人はこの功績によって1962年にノーベル賞を受賞しました。昔読んだ記憶では『二人が世界中を駆け回って、あるときはアルプス、パーティー、××遊覧...と遊んでばかりいるかのように見えたが、その実アメリカ、イギリス、フランス...の多くの生化学者、生体高分子の研究者、X線回折学者、遺伝学者らと会い、討論している間に「遺伝子はつかみ所のない不規則なものから規則正しい構造を持ったもの」へと変わり、それが信念となつてついには「らせん状物質によるX線回折の理論」を手に入れるという』話でした。化学の世界ではよく知られているX線回折のブラッグや「GENERAL CHEMISTRY」を書いたポーリングはともに二人の先輩で、交際がありましたし、ポーリングは先陣争いをした仲でもありました。その頃私は、研究者とは研究室で実験や思索中心の生活を送っているものと思っていましたので、新しい発見でした。クリックは昨年亡くなりましたが、後の皆さんが長寿なのも共通です。研究者を目指すには健康も必須です。本は色あせても内容は色あせていません。新装版も図書館に入ったそうなので、研究に関心のある方は読んでみてはどうですか。

新入生対象コンピュータ利用アンケート調査結果

総合情報センター 川辺 涼子

総合情報センターでは、演習室利用講習会の内容を検討する基礎資料とするため、平成13年度より新入生を対象としたコンピュータ利用アンケート調査を行ってきました。調査内容は中学校における演習内容、学習状況、自宅における所有状況、利用状況、及び学習に関する意識等です。

調査結果において特筆すべき点を2点ほどあげておきます。一つは、設問2の中学校における演習内容調査で、平成15年度からプレゼンテーションという内容が回答されるようになったことです。それまで回答されていたタイピング、ワープロ及び表計算といった情報処理の基礎的な内容のものだけでなく、プレゼンテーションといった総合学習的な要素を含んだ内容のものが取り入れられ始めたことは、中学校における情報処理教育に対する取り組み方の変化を表していると考えられます。その要因としては、前年度の中学校学習指導要領改定による情報科目の指導の義務付けが考えられます。

またもう一つは、設問4の中学校における授業時間数調査で、中学低学年においてコンピュータの利用促進がなされているのがはっきりしてきたことです。

この調査を行ってきて、中学校においてコンピュータ利用の多種多様な学習が行なわれていることがわかってきました。そのことで本校においても、コンピュータ利用教育の変化に応じた情報処理教育が求められていると思われれます。そして、本校の情報処理教育の基盤的役割を担う総合情報センターでは、コンピュータの多様な利用状況に対応できるよう、これまで以上に学生への学習支援を行なっていきたいと考えています。

以下に、調査を開始した平成13年度から今年度（平成16年）までの結果を紹介しします。紙面の関係上、一部掲載を省略しています。全結果はWeb上に掲載していますので、省略分はそちらを参照してください。掲載URLは次のとおりです。総合情報センターのページからもリンクしています。 <http://www.center.nara-k.ac.jp/pc-enquete.html>

対象数・回答数及び回答率

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
対象数(1年生総数)	207人	210人	211人	209人
回答数	195人	184人	205人	185人
回答率	94.2%	87.6%	97.2%	88.5%

※「クラス別回答率」及び「設問1. あなたの出身中学がある都道府県をお教えてください。」は掲載省略（Webページに掲載）

設問2. 中学校ではコンピュータを使ってどのような演習をやっていましたか。(複数回答可)

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
タイピング(キーボードの練習)	94人	104人	106人	120人
ワープロ(文書処理)	105人	94人	92人	101人
お絵描き(ペイント)	14人	99人	93人	97人
表計算	63人	61人	71人	79人
電子メール	7人	26人	32人	35人
ホームページ閲覧	48人	73人	95人	107人
ホームページ作成	16人	21人	30人	34人
プログラミング	32人	26人	15人	17人
プレゼンテーション	0人	0人	3人	7人

設問3. プログラミングをやっていた人にお聞きします。使っていた言語は何ですか。(複数回答可)

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
C言語	2人	2人	0人	2人
BASIC	10人	11人	8人	9人
LOGO	3人	3人	4人	1人
わからない	17人	10人	3人	7人

設問4. 中学校でのコンピュータを使った授業時間数は週何時間ありましたか。

	平成13年度		平成14年度	平成15年度	平成16年度
1年時にはなかった		1年時にはなかった	154人	131人	108人
1年時に週2時間未満	平成13年度	1年時に週2時間未満	24人	66人	54人
1年時に週2時間	この設問は調	1年時に週2時間	6人	8人	12人
1年時に週3時間以上	査していない	1年時に週3時間以上	0人	0人	1人
2年時にはなかった		2年時にはなかった	121人	103人	60人
2年時に週2時間未満		2年時に週2時間未満	47人	82人	91人
2年時に週2時間		2年時に週2時間	15人	18人	20人
2年時に週3時間以上		2年時に週3時間以上	1人	2人	4人
3年時にはなかった		3年時にはなかった	36人	35人	34人
3年時に週2時間未満		3年時に週2時間未満	109人	128人	114人
3年時に週2時間		3年時に週2時間	35人	38人	22人
3年時に週3時間以上		3年時に週3時間以上	4人	4人	5人

※「設問5. コンピュータ全般における習得度の自己評価をお教えください。」「設問6. タイピングにおける習得度の自己評価をお教えください。」「設問7. 自宅にコンピュータがありますか。」及び「設問8. そのコンピュータは自分専用ですか、家族と共同で使っていますか。」は掲載省略 (Webページに掲載)

設問9. 自宅のコンピュータを使っている時間は週何時間ですか。

	平成13年度		平成14年度	平成15年度	平成16年度
自宅にない及び使わない		自宅にない及び使わない	47人	45人	14人
週1時間未満	平成13年度	週1時間未満	29人	48人	8人
週1~2時間くらい	この設問は調	週1~2時間くらい	38人	28人	60人
週3~4時間くらい	査していない	週3~4時間くらい	32人	27人	20人
週5~6時間くらい		週5~6時間くらい	11人	13人	9人
週7~8時間くらい		週7~8時間くらい	5人	9人	8人
週9~10時間くらい		週9~10時間くらい	6人	5人	13人
週10時間以上		週10時間以上	19人	30人	30人

設問10. 自宅のコンピュータはプロバイダと契約していますか。

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
契約している	110人	119人	136人	129人
契約していない	47人	31人	28人	11人
わからない	4人	7人	20人	28人
コンピュータ所有に対する契約の割合	68.3%	75.8%	73.9%	76.8%

設問11. あなたはゲームをしていますか。(コンピュータのゲームに限らずテレビゲーム機、携帯電話等、ゲーム機全般において)

	平成13年度		平成14年度	平成15年度	平成16年度
ゲームをしている	平成13年度この設	ゲームをしている	97人	112人	149人
ゲームをしていない	間は調査していない	ゲームをしていない	48人	62人	35人

設問12. コンピュータについて学ぶことは、あなたにとって将来、必要だと思いますか。

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
必要だと思う	188人	182人	201人	174人
必要だと思わない	5人	2人	4人	5人
無回答	2人	0人	0人	6人

以上

マイベストセレクション

妖怪画談 著・水木しげる 岩波書店

1S 田中 省吾

まず、この本はその名のとおりに妖怪に関する本です。

著者「水木しげる」と言えば「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な方で、いわば妖怪のエキスパート。その水木しげるが、書いたこの本「妖怪画談」は、コミカルなキャラクター化されたたくさんの妖怪たちが作者の意見を含めて、詳しく説明されています。

高専の図書室には、この本のほか続編が2冊あり、それらも同じく興味ぶかい本なので、ぜひ一度借りてみてはどうでしょうか？

二十四の瞳 著・壺井栄

1I 仁池 卓史

僕が今まで読んだ中で一番心に残っている本は『二十四の瞳』です。

これは香川県小豆島の小さな村を舞台に日本の戦争の歴史を書いた物語です。小学校の無邪気で小さな生徒たちとの日々。彼らが大きくなるにつれ拡大する戦火。徴兵され、帰ってこなかった者。学校教育で戦死することを名誉だと思ふ子供。

これを読むと戦争の非道さと残酷さが伝わり、二度とあってはならないことだと再認識させられます。皆さんもぜひ読んでみてください。

魔法使いハウルと火の悪魔

著・ダイアナ・ウィン・ジョーンズ 徳間書店

1C 水谷 祐介

この本は11月20日に公開された映画「ハウルの動く城」の原作です。ソフィーと人々の掛け合いがとてもおもしろいです。是非とも読んでみて下さい。D・W・ジョーンズさんの他の作品「大魔法使いクレストマンシー」のシリーズなどもおすすめです。

空想科学読本 1～3

著・柳田理科雄 メディアファクトリー

2M 小倉 三郎

高専に入られた方もアニメが大好きな方も多くおられるはず。そんな方にオススメなのが空想科学読本。この本はアニメの世界の空想のことを現実の科学的にみて正しいかどうか検討する本です。その結果が実に笑える本です。アニメ世界の無茶が分かると同時にやはりそう言うのにあこがれるのに気付かされます。ガンダムやマジンガーZやエヴァンゲリオンなどのロボットものから仮面ライダーなどの特撮ものはては暴れん坊将軍まで古今東西の幅広く扱っております。自分の好きなアニメの以外な一面がみれる本と言えると思います。

日本語でかんたんプログラミング！

著・山本峰章 毎日コミュニケーションズ

2S 谷 宗一郎

私は『日本語でかんたんプログラミング！「ひまわり」で学ぶアプリケーション作成 著/クジラ飛行機(山本峰章)刊/毎日コミュニケーションズ』を紹介します。この本は日本語プログラミング言語ひまわりについての公式ガイドブックです。ひまわりはC言語などではややこしいGUIプログラミングを簡単に行えます。大規模ソフト開発には向きませんが、簡単な定型処理には遺憾なく実力を発揮します。これを読んでひまわりを始められては如何でしょうか？

**ビッグ・ファット・キャットの
世界一簡単な英語の本**

著・向山淳子、向山貴彦 幻冬舎

3M 八木 賢大

この本は英語の嫌いな人でも普通の教育とは違った形で分かりやすく学ぶことができます。その方法は二つの箱を用いて英文を説明すると

いうもので、文がいくら長くなってもこれは適用されます。極力シンプルに仕上げられたこの本は、日本語が多く、前置詞を絵で表し、意味を感覚で捉えさせるなどの工夫もなされています。英語がいかにか簡単な言語であるかを教えてくれるこの本を一度手にしてみたいかでしょうか。

坂崎幸之助のJ-POPスクール

著・坂崎幸之助 岩波書店

3E 藤井 智史

この本は、J-POPというタイトルがついてますがフォークソング中心だった作者の音楽史をまとめたような内容ではあるのですが、決してデータベース的なまとめ方をしておらず、主観的に回想し、それを思いを込めてまとめたような作品になっています。3、40年くらい前を思い起こしているのリアルタイムで生きていないので自らの記憶とは結びつきませんがそれでもフォークソングが好きならば面白さがわかると思います。

ヒュウガウイルス

著・村上龍 幻冬舎文庫出版

3S 藤本 準

僕の今までで一番いいと思った本は村上龍の「ヒュウガウイルス(幻冬舎文庫出版)」です。

この話は「五分後の世界」という話の続編とされるもので、舞台設定が五分後の世界なのです。五分後の世界とは、この世界の五分後というのではなく、全く別の世界であり、その世界の日本は経済大国などではなく戦闘的国家です。それも、とても強力な。そして、これはその日本でのほんの一コマの話なのです。

王妃の館 著・浅田次郎 集英社

3C 道下 友美

百五十万円の豪華ツアーと、二十万円の格安ツアー。倒産寸前の旅行会社が起死回生の策として、パリ・ヴォージュ広場の「王妃の館」にこれら二組のツアー客を二重宿泊させる…。

ツアー客は元警察官、カード詐欺の夫婦、オカマ、OL、作家、自殺を図る夫婦など一癖も二

癖もある人たちばかり。物語の合間には王妃の館にまつわるルイ十四世の昔話も織り交ぜられていて、これは別の話としてでも楽しめると思います。

ポッコチャン 著・星新一 新潮社

4I 安達 健一

この本はSF短編集でショートショートと呼ばれています。SFとはいっても舞台は現代の話が多いので本格的なSFではありません。1話1話が短いのでとても読みやすいです。だいぶ昔に書かれたにもかかわらず、同じ年代に書かれた作品とは違い昔の本という感じがなくて、今でも面白いと感じられます。

NHKスペシャル

地球大進化～46億年・人類への旅～ 1 生命の星 大衝突からの始まり

NHK出版

4C 上辻 広

「あなたのなかには、地球46億年の大変動が隠されている」

この本はNHKスペシャルで放送された地球大進化を書籍化したものです。今現在人間を含め多種多様な生命が生きている地球は“母なる地球”などではなく、大変動を繰り返す“荒ぶる父のような地球”でした。生物は大変動のたびに絶滅の危機に晒され、乗り越えてきました。自分が今現在生きていける事に感動せずにはいられなくなる1冊です。



ぎりぎりの英会話学習法

「英語学習が熱い」。それは、学生諸君も感じていることでしょう。筆者は図書館で仕事をしていますが、皆さんがさまざまな英語の参考書を欲していることを、切実に感じています。図書館は、皆さんのために運営されているのですから、その要望に応える必要があります。ましてや、いまや英語能力の向上は、社会全体の要請でもあるのですから。

ところで、日本における英語学習について、以前からよく聞くフレーズがあります。

会話には、役に立たない。

勿論、それを改善する対策は講じられているのでしょう。ですが、「駅前留学」なる新語を創造した企業の繁盛ぶりから察するに、さらなる英会話能力の向上を求めている人は多いと考えられます。しかし、そういう「擬似留学」ですら、けっこうな費用が必要です。本当の留学をするとすると、結論は言うまでもありません。そこで、筆者が、お金を使わずに英会話を学習する方法を伝授しましょう。

それは、じつに簡単なことです。目についた外国人に、英語で話しかければいいのです。筆者は、京都市に在住していますが、旅行者を「お勉強」のパートナーに選ぶようにしています。その外国人が地図や案内図を見て考え込んでいるようなら、しめたものです。堂々と声をかけましょう。自信なさそうにコソコソしていると、「アヤしい誘いか?」と警戒され、無視されます。その外国人が英語圏の人でないこともありますが、たいてい英語も話してくれます。それはそれで、お互い「カタコト」同士で、かえって楽なものです。

ただし、くれぐれも注意すべきことは、「声をかけたからには、最後まで面倒をみる」ということです。通常は交通機関や道や宿の案内などをすることで足りませんが、一方で、相手を目的地まで連れて一緒に行くような事態がおこることも覚悟しておくべきです。これを怠ることは、民度が低いとアピールするようなもので、日本の印象は確実にダウンするでしょう。

必要なのはチャレンジ精神と誠意です。実際のところ、彼らも異国の見知らぬ人間と会話できることが楽しいようで、妙に話がはずむことも多々あります。だからこの方法でいいのだと、筆者は解釈しています。話がかみあいだすと、彼らは日常のスピードで話しかけてきます。手加減なしです。断片的にしき意味がわからなくなり、もはや文法など気にしてられません。思いつくかぎりの単語の羅列で対処します。この「単語羅列方式」は、知らず知らずのうちに命令口調になりがちです。失礼であるとは思いつつも、それを気にしている余裕はありません。何を言っているのかさっぱりわからなくなることもあります。限界です。このとき筆者は、無意識に日本流に「へ?」と言ってしまいます。この言葉あるいは反応が、彼らには意味不明であるようです。そのままの調子で話し続けられます。場のながれからして、"Slowly, please."のひとことで何とかなるはずですが、それに気づくのはあとになってからです。

この文章のタイトルを「ぎりぎりの英会話学習法」としたのは、いま書いたようなことになるからです。興味を持ったあなた。

次は行動です。試してみましょう。話がはずんだ相手とメールアドレスの交換などをしたりするのも、現代ならではの楽しみです。あとで「こう言っていたのか」「ああ言えばよかった」などと復習すれば、学習効果も増すことでしょう。また、相手の国や出身地を地図で調べてみたりすることも、あなたの知識をひろげることになります。

最後になりましたが、図書館においてほしい英語の参考書があるのなら、「意見箱」や「希望図書ファイル」を活用してください。勿論、図書館は、あなたの学習をサポートします。

(しみずたかお)



編集後記

読書感想文コンクール入選者の皆さん、おめでとう。残念ながら選にもれた皆さんにも、ありがとうございますと言葉をそえます。また、退職される先生方、おつかれさまでした。と言うのは、まだちょっと早いですよね。とにかく、今回の「図書館だより」の完成にご協力いただいた皆さん、お忙しいなか本当にありがとうございました。

(情報メディア教育センター)

奈良工業高等専門学校図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp/>